

2024年2月25日

四旬節第二主日

菊地功大司教 メッセージ

イエスの福音宣教は、旅路です。イエスは、一定の成果を手にし、安心と安全を得た地にとどまり続けることをよしとせず、福音を告げるために旅を続けます。その旅は、常に挑戦に満ちあふれていますが、臆することなく、イエスは福音をあかしし続けます。

マルコ福音は、その旅路を歩むイエスが、三人の弟子たちの前で光り輝く姿に変容した出来事を伝えています。神の栄光を目の当たりにし、

「これは私の愛する子、これに聞け」という神の声を耳にしたペトロは、その栄光の輝きの中に留まり続けることを望み、仮小屋を三つ建てることを提案します。しかしイエスは歩み続けます。

本日の第一朗読である創世記は、神からの試練の内にあるアブラハムが、神への信頼のうち理解不可能な未知の領域に歩みを進める姿を記しています。イサクを献げるようにと言う、神からのいわば無理な要求です。アブラハムは、今の安定に留まることなく、神に従って前進することを選びます。アブラハムの人生は、安定に留まらず、常に挑戦しながら旅を続ける人生でした。その生き方を、神は高く評価しました。

信仰は、わたしたちに常なる挑戦へと旅立つことを求めます。

四旬節にあたり教皇フランシスコは、「荒れ野を通り、神はわたしたちを解放へと導かれる」というタイトルのメッセージを発表されています。

メッセージの中で教皇は、わたしたちが回心の道を歩み続けることを、荒れ野を旅したイスラエルの民になぞらえ、「希望を失い、荒れ果てた地にいるように人生をさまよい、ともに向かっているはずの約束の地が見えないとき」、民は元の奴隷状態を懐かしみ、前進するよりも過去に縛られ続けようとしたことを指摘します。

同じように、現代社会に生きているわたしたちも、「世界規模での兄弟愛の実現を目前にしながら、科学、技術、文化、法制度が、万人の尊厳を保証しうる水準にまで発展しながら、格差と紛争の闇を進んでいること」の理由は、罪の状態から解放されようとするよりも、「自由を犠牲にしてまでも、なじんでいるものの安心感に惹かれる」わたしたちの弱さであり、他者の叫びへの無関心であると指摘されています。

その上で教皇は、教会のシノドス的な姿を追求することは、「四旬節が共同体での決断の時でもあると示唆してくれます。個々人の日常を改め、地域の変えうる、今の流れとは違う選択を大小さまざまに行う時です。購買の意識化、被造物のケア、社会から無視され見下げられている人たちの受け入れ、そうしたことを選択していくのです」とのべています。

わたしたちは安住を求めるのではなく、常に挑戦し続けながら前進を続ける神の民です。希望が見いだせないときにも、「奴隷状態から抜け出る勇気」をもって、歩み続けたいと思います。

教皇様は、「信仰と愛が希望に歩みを教え、希望が信仰と愛を引っばっていくのです」と記されます。勇気を持ってともに歩み続けましょう。